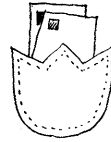


「日本幼児保育史」研究余滴（五）



岡田正章

日本の幼児保育史ということばは、刊行された六巻の書物の書名としてよりも、何かしら、そのために汗水流して苦労したものの、また、当時お互いに若かった村山貞雄、水野浩志、津守真、安戸健夫の四氏、また、赤池溥子さん、豊田玲子さんたちと、まだ木造校舎のあまりきれいでなかったお茶の水女子大学の津守先生の研究室で、大学図書館から借り出した文献を、カメラに接写装置をつけてコピーをとったり、筆写したりしたことがついてまわるものとして耳に響く。しかし、今ではよい協同研究をさせていただけたとなつかしく思われる。

文献として、明治二十九年に結成されたフレールベル会（大正七年、日本幼稚園協会と改称今日に至っている）が、明治三十四年

に創刊した保育の専門月刊雑誌「婦人と子ども」（現在本誌「幼児の教育」として、実に七十五年の長きにわたって刊行し続けられている）を、第一巻第一号から明治・大正・昭和のすべてにわたって眼を通すことができた。所蔵はお茶の水女子大学の付属幼稚園と付属図書館とに、各一揃いあった。非常に貴重な文献であり、わが国の保育史を研究するひとにとっては、必見の文献の一つといえよう。

研究期間中は、どこに旅行しても、何か史料になるものはないかと眼をみはっていたことも思い出される。たまたま、宝仙学園短期大学の保育科学生をつれて、大阪・京都の幼稚園・保育所を見学旅行したときのことである。大阪教育大学付属幼稚園を訪ね、園長室で園長先生と懇談しながら、園長室のなかにある書棚に眼を向けていると、黒い背のかなり厚手の本が三冊所蔵されて

いる。何だろうかと園長先生にたずねたら、古くからおいてある本ですよとの答え。一寸拝見させて下さいと手にとってみると、何と、かねてから是非調べてみたいと探していた「京阪神保育会雑誌」を製本して三冊にしたものであった。驚きとともに、絶句にも近い喜びであった。早速お願いして、拝借し、東京にも帰り内容を調べて、これを保育史の素材とすることができた。この雑誌は、大阪の愛珠幼稚園（わが国における明治時代の保育教材を所蔵した宝庫ともいえる貴重な存在）にも、一部所蔵されているが、第一号から第六号など一部が欠けている。京都・大阪・神戸の三市の幼稚園関係者が、保育の充実・幼稚園の振興を願って京阪神三市連合保育会を結成したのは、明治三十年である。翌三十一年から年二回の割合で連合会雑誌を刊行したのである。この雑誌のなかには、連合会総会に招かれて講演した倉橋惣三や和田実などの講演速記が収録されている。「幼児の教育」誌とともに、保育史研究には貴重な資料といえよう。

文献の探索では、そのほか東京の古本屋歩きをしたこともなつかしい。このとき、僅かしか出版されなかった「日本基督教幼稚園史」を発見したときには、思わず小躍りして狂喜したことが思い出される。この本は、昭和十六年、「基督教主義の幼稚園が我が国に渡来五十年を祝ふ記念事業の一つとして」編纂されたもので

ある。まもなく、太平洋戦争が勃発し、やがて本土、特に幼稚園が多く設立されている都市地区は、アメリカ軍の飛行機による爆撃を受けた。ほとんどの市街地区は焼土と化し、このため、昭和二十年八月十五日以前に刊行された書物の多くは消失してしまっている。明治・大正・昭和前半期の文献を調べることは、非常に困難な場合が多い。「日本基督教幼稚園史」もその一つである。

そのほか、東京都立大学の近くにある古本屋佐野書房の店主佐野さんと平素から親交していた。その佐野さんが、店によったとき「珍しい本が入っているので、先生にとっておきましたよ」といって赤茶けた雑誌を三十冊位たばにしたものを出して下さいと。ひもをほどこいて調べると、「社会事業」「幼児の教育」「児童保護」などの雑誌で、しかもそのすべての雑誌には、生江孝之の論文が掲載されている。さらに驚いたことは、雑誌のほかに一冊和綴じの本らしきものがあるので開いてみると、生江孝之自身が書いたと思われる「米騒動」についての論文が和紙に筆で書かれているものであった。昭和十三年に刊行されている「生江孝之君古稀記念」という書物の六五五頁「著作目録」に、「米騒動」に関する卑見——大正七年九月「原稿」と記されている。とすれば、私が入手したこの和綴じのものは、生江が書き記した原稿そのものようでもある。生江という朱印も押してある。かねてか

ら、生江孝之を、わが国における社会事業の開拓者をして保育事業の先覚者として位置づけようと思つていただけに、こうした文献の入手は、まことに胸躍るものであった。

また、ある日、宝仙学園短期大学で授業をすませて教授室に戻ってきたら、同短大の清水俊夫先生が、「先生、こんな古本が入ってできましたが」と手渡された。書名が「幼稚園保育」ということだけは明らかであるが、著者、出版年、出版所は何も記されていない和綴りの三十九葉の書物である。いままで保育関係の和綴りの書物としては、近藤真琴の「子育ての巻」（明治八年刊）、関信三の「幼稚園法二十遊嬉」（明治十二年刊）、飯島半十郎の「幼稚園初歩」（明治十八年刊）と、翻訳書としての「幼稚園」「幼稚園記」（いずれも明治九年刊）程度のもので知られてきた。倉橋惣三の「日本幼稚園史」のなかに記されている「保育文獻」の項にも、「幼稚園保育」という書物名は見当らない。

一気にこの本を読んでいくなかで、いくつかのことに気がついた。まず第一に、「幼稚園」という訳書の原本が「英国のロンジと云ふ人の著はせしものにてイングルスキンデルガルトネルと題せるは英文の書文部省にて翻訳出版せるものなり」とある。倉橋

の前掲書には、「英国ロンゲ氏著せる英国幼稚園と題する英文の書」とは記してあつても、「英国幼稚園」の原名が何であるかは知られていなかった。実は、このことの発見が、後述する国会図書館での新たな発見の導火線となつてくれることになった。

第二に、十八頁の「第四十七節読み方」の文中で、次のような叙述に出合った。当時の文字指導についても一瞥することもできると思われるので、やや長いが引用しておきたい。

「読み方は初に片仮字、平仮字を以て幼児の知り得たる物の名等の綴り方の易きものを黒板に書き示して仮字の称へ方用い方を教へ後には仮字を記せる骨牌を以て物の名等を綴らしむ

附言 読み方は幼稚園には必用にはあらず全く之を省くも少くも差支へなし 然るに之を教ふる所以のものは父兄たる者幼児の教育を急ぎ幼稚園にて只玩具を以て遊ぶのみを見て満足せず 幼稚園の帰りに私塾に遣り読書習字の業に就かしむる者多し 抑幼稚園の保育課は皆遊嬉に属し大人より見れば実に平易なるへけれども幼児に取りては相應の疲労を覚ふへし 然るに読書習字の如き興味のなきものを疲労せる後に課せらるるときは幼児の困難幾くそや 教育上亦決して喜ぶべきことに非らず されはとて世の父兄の企望に全く背馳するも得策に非ず

且我邦の文字に至つては平易にして教ふにも学ふにも困難な
ければ之を稍や年長の幼児に教ふることなさは一には父兄の
望みに適ひて幼児を強ひて私塾に遣るの弊を減し 二には後日
小学に入るに及て幼稚園と大なる差異を感ぜざる便あらんかと
の心得より 幼稚園の上の組には仮字にて読むこと書くことを
教へ小学校にては幼稚園の紙摺み紙折り縫取り等を加へらるる
こととなりたるならん 然る後私塾に遣るの弊は大に減したる
か如し 然るに昨年二月文部省より学齡未満の幼児を学齡児童
と共に教育するは衛生上其害少からざるにより幼稚園の保育法
によりて保育すへしと達せられしかは地方にては其前まで学齡
以下の幼児を勧めて入学せしめたることなれば其達しにより急
に差支へあれとも幼稚園の保育法に熟せず 止むを得ず只学齡
児童と教場を異にし読み方書き方教へ方等を課せんと試る者頗
りに是あり故に次に読み書きを教ふことの早きに過くへから
ざるの理を述べ参考以供す」(以下略)

この文中の「昨年二月文部省より」という叙述によつて、この
書物の原稿が書かれたのは、間違いなく明治十八年であることが
知られた。何故なら、ここにいう文部省の通達は明治十七年二月
に全国に出されているからである。このようにして、一つの書物

の出版年を見当づけることができ、その内容がやはりフレーザー
の恩物中心であることの時代性も知ることができた。しかし、依
然として著者が誰であるかは不明のままである。「日本幼児保育
史」第一巻の一三八頁に「明治十八年出版されたと思われる幼
園保育」と記してあったり、一四〇頁の注八に「筆者不明・幼
園保育」と記してあるのは、そうした事情による。この書物は、
宝仙学園短期大学図書館に所蔵されている。

資料探索の上で、生涯忘れることのない感動の場面として、国
会図書館のできごとがある。共同研究の始まった昭和三十一年
ごろには、現在東京・三宅坂に所在する国会図書館は、東京・上
野の国立博物館の近くに、古い建物として建っていた。そのうち
に、現在の場所に新装なって移転した。保育史研究は国会図書館
の移転にもおつきあいしながら進んでいたということになる。

新装なった三宅坂の国会図書館にも足繁く通った。書庫から五
冊位ずつ図書館員が出してくれるのを待っていたのでは、沢山の
文献に眼を通そうとする場合には、時間のロスが大きすぎる。そ
こで、大学の図書館長から、特別閲覧便宜方の要請書を出しても
らい、自分自身書庫に入って、書庫のなかで、必要な文献を出し



てきては、必要などころを書き写した。たまたま、明治末ないし大正の始めのころわが国の保育界にモンテッソーリ法が流入してきたことの事情を調べておこうと、書庫のなかの雑誌「心理学研究」のバックナンバーを読んでみた。その中途、休憩のつもりで書庫のなかを何気なく散策していた。すると、普通、背表紙が分るようたてて書棚に入っているはずなのに、八十冊ばかりの本が、ほこりにまみれて、ひもにしばられたまま横になって、書棚の一番下におかれているのが眼に入った。何気なくひっぱり出して、ひもをといて手にしてみると、すべてが洋書である。

みてゐるうちに、Donai, A., Kindergarten: manual for the instruction of Frobel's system of primary education, 1872 という書名の本があるではないか。これこそ、まさに、明治九年関信三が訳した「幼稚園記」の原本ではないか、全くの驚きである。やっぎ早に、その書名をみていくうちに、そのほとんどすべてが幼稚園、幼児教育に関するものであることがわかった。しかも、その本には、「明治十年三月文部省交付」という印がおしてあり、「教育博物館印」という公印が大きく押されている。このころ、誰かが外国から持ち帰ったものと思われる。明治九年ごろ翻訳されたときの原本がこれであったかも知れないぞと思ったりした。

そのうえ、明治九年に訳書となって刊行された「幼稚園」の原本ともいうべきロンジ夫妻の英語本が、次のようなものとして発見できた。

Johann and Bertha Ronge, A Practical Guide to the English Kindergarten (children's garden), for the Use of Mothers, Governesses, and Infant Teachers. 1877

かつ、この英語書をよんでいると、その序文(Introduction)の文章が、どこかで読んだものとそっくりである。それは、訳書「幼稚園」の第一巻の冒頭にある「総論」の文章であった。しかし、倉橋物三はその著「日本幼稚園史」のなかで、次のように記している。「上巻の総論の部は、訳者桑田氏の幼児教育についての意見であって、学齢以下の幼児を指導するには、恩物を用ひるのが最もよい方法であるから、その任に当る者が大いに心すべきであるとの意である。総論は訳文ではなく、全く桑田氏の意図から出たもので、当時に於てかうした訳書をなす程の識者として、氏独得の意見があらはれてゐる」(同書三五七頁)

原書と訳書とを照らし合わせてみると、訳書の総論部分は、原書の Introduction 部分であって、明らかに訳文である。したがって「日本幼稚園史」のなかでの倉橋の指摘は、事実と異なる、誤まった把握ということになる。こうしたことの見ても、この幼児

保育史共同研究のなかで、国会図書館の書庫に入っている、偶然のチャンスでのがらに属すものであった。

以上、今回の共同研究の過程で、文献の面でさまざまのよい経験をしたことを中心に思い出を記した。そのほか、いろいろな方と出会えたことも、なつかしい思い出となっている。そのなかには、すでに故人となった方もおられる。そのお一人、群馬県高崎市所在の日の丸幼稚園々長山端息耕先生を同園にお訪ねしたのは、昭和三十六年だったと思う。明治三十六年に、同地に私立樹徳子守学校を開設されて以来、地域の子女のために努力を重ねられた。昭和十六年保育施設「日の丸保育園」を開設、戦後昭和三十年に幼稚園に転換。こうしたことの経緯をうかがい、仏教主義の立場での子女教育・保育の姿を覚えていただけた。しかし、いまは故人となられた。そのご令息・現園長山端敬吾先生から、昨年一月封書をいただいた。開封してみると、昭和十一年七月一日撮影の「高崎・樹徳学校写真——文部省の命により、スイス国チューリッヒ市ベスタロッツ記念館へ寄贈した写真板より複製したもの」四葉が入っていた。ご尊父からいろいろお話を聞いていた私のことを思い出され、新たに入手されたこととて十数年を経

た今日、お送り下さった芳情がありがたかった。

そのほか、多くの方々から親切を受けたことがなつかしく思い出される。ただ、京都市の、明治のころ幼稚園に入ったという老人をたずねたとき、その思い出話が、青年期の恋愛などのことを夢中で話され、幼稚園のことは最後になって、「すっかり忘れたよ」との結末になったりしたこともあって、こうした古老との話のむつかしさを感じたことも思い出の一つである。歴史研究は、第一資料を掘り出そうとすれば、時間と労力が莫大にかかるものである。しかも、まだまだ十分なものとはならない。いまでも、地方に出かけると、あの頃の癖がぬけないで、資料掘り出しにかかったりしている。

(明星大学・宝仙学園短期大学)

